原　著

ボランティア・グループ成員のコミュニティへの主体的・能動的関与意識に関する共分散構造分析

Factors that determine formation of a mindset for independent/active participation in the community among volunteer group members

下山田鮎美[1)]、星旦二[2)]
Ayumi SHIMOYAMADA[1)] , Tanji HOSHI[2)]

1）東北福祉大学健康科学部保健看護学科
2）首都大学東京大学院都市環境科学研究科

1）Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Tohoku Fukushi University
2）Department of Urban System Science, Graduate Scool of Urban Environmental Sciences, Tokyo Metropolitan University

抄録

本研究の目的は、ボランティア・グループ成員のシチズンシップの一側面である「コミュニティへの主体的・能動的関与意識」の規定要因を明らかにすることである。グループ成員 68 名を対象とした質問紙調査を実施し、共分散構造分析を用いて解析した結果、＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞（＜＞は、潜在変数を示す）を大きく規定していたのは＜コミュニティとの関係性への思慮＞（標準化推定値 0.92）であり、この＜コミュニティとの関係性への思慮＞を規定していたのはボランティア・グループでの活動を通じた＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞（標準化推定値0.63）であった。そして＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞の決定係数が0.85であることから、＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞の 85％がこれらの潜在変数によって説明されることが明らかにされた。さらに、本モデルの適合性を確認したところ、適合度指標（GFI）が 0.920、基準化適合度指標（NFI）が 0.891、平均二乗誤差平方根（RMSEA）は 0.001 であり、高い適合度が得られたことから、適切な概念モデルであることが示唆された。

これらの結果を踏まえ、地域住民のシチズンシップ形成に資するボランティア・グループの活動のあり方として、地域社会の課題と真剣に向き合うという体験、グループ成員のコミュニティ感覚の高揚を促進する体験を内包させていくことの有用性について論じた。

Abstract

Factors that determine formation of a mindset for independent/active participation in the community among volunteer group members.

The purpose of this study was to clarify the factors that determine the formation of a mindset for independent/active participation among the volunteer group members in the community. Self-report questionnaires were administered to a total of 68 members of volunteer groups. A structural equation model of “mindset for independent/active participation in the community” (<> means latent variable) was developed and tested by the Amos 7.0 computer program (SPSS14.0).

The standardized coefficient for “mindset for independent/active participation in the community” was shown to be 0.85 (GFI=0.920, NFI=0.891, RMSEA=0.001) based on the three latent variables in the hypothesized model. The very large effect of “mindset for independent/active participation in the community” held by volunteer group

members was determined by “the thought of the community as being related to themselves”, which was in turn determined by “community identity formation experience”.

These results suggest important experiences in the activities of volunteer groups contributing to citizenship building: 1) experiences that would honestly solve problems of the communities, and 2) experiences that raise the sense of community among volunteers.

キーワード：コミュニティ・エンパワメント、ボランティア、主体的・能動的関与

Key Words：community empowerment, volunteer, independent/active participation

Ⅰ．緒言

今日、わが国においては地域の視点に立脚し社会保障のあり方を考えることが重要視され、サービスを新たに提供し、「新しい公共」の創出に資するＮＰＯ法人やボランティア・グループの機能に関心が寄せられている[1,2]。その一方で、それらが決して行政の代替機能ではないこと、市民のエンパワメント、シチズンシップ形成及び自律性を促進する触媒機能を有していること[3,4]、さらには、シチズンシップ形成に資する役割を再考する必要があることが指摘されている[5]。

さて、これまで筆者は、O 市 M 地域（旧 M 町）（以下「M 地域」とする）を研究フィールドとして、心身障害児者の地域生活の実現を目指して展開された複層的なソーシャルサポート・ネットワーク形成を志向した実践活動（以下「同実践活動」とする）の過程を明確化し、コミュニティ・エンパワメントとの関連を指摘してきた[6,7]。第 1 報では M 地域における同実践活動の展開過程及びその特徴を、第 2 報では同実践活動における「町民総ボランティア運動」に焦点をあて、コア・メンバーらを突き動かす社会的相互作用の過程及び創発的な社会的相互作用を実現する要素を明らかにした。これらの結果からは、「同実践活動」の展開過程が地域住民のシチズンシップ形成に資するものであったこと、コミュニティ・エンパワメントにおいては、シチズンシップを有する地域住民の存在が必要不可欠であったことが示唆されている。しかし、これらの結果は、あくまで同実践活動に参与したコア・メンバーらを対象としたものであり、同実践活動の一側面を捉えたものに過ぎない。そのため、M 地域の同実践活動とコミュニティ・エンパワメントの関連を明らかにするためには、コア・メンバーに限定せず、同実践活動に参与した地域住民のシチズンシップ形成の規定要因を明らかにすることが不可欠と考えられる。

そこで、本研究では、これまで述べたようなシチズンシップの形成に地域住民の「コミュニティへの主体的・能動的関与意識」が深く関与すると仮定し、ボランティア・グループ成員のグループでの活動に対する意味づけとコミュニティへの意識に着目した概念モデルを設定した。そして、このような意識の規定要因を明らかにすることを研究目的とした。

Ⅱ．方法

1．調査フィールドの概要

M 地域は、A 県のほぼ中央に位置し、総面積約 30km^2、基幹産業は農業（総農家数の約 90％が兼業農家）である。また人口は約 7, 000 人、世帯数が約 2,000 戸、高齢化率が約 22％となっている（2003 年 1 月 1 日現在）。歴史的には、城下町として繁栄した地域であり、2006（平成 18）年 3 月に O 市（人口約 140,000 人、2006 年 1 月 1 日現在）との合併によって M 町から O 市 M 地域となった。

2．調査対象及び調査方法

調査対象者は、同地域において活動中のボランティア・グループのうち、「町民総ボランティア運動」を通じ組織化された「結いの会」「彩の会」の会員 68 名である（各グループの概要については表 1 を参照）。

調査方法は、質問紙調査であり、M総合支所（旧M町役場）における文書配送システム（各行政区に居住する町民が行政の広報誌等の配布や回収を担う）を活用した留め置き法とした。調査期間は 2006（平成 18）年 5 月 16 日から 6 月 9 日、有効回答数は 61 名（有効回答率 89.7%）であった。

3．調査内容

調査内容のうち、個人の属性、ボランティア･グループにおける活動状況、ボランティア・グループ以外の地域活動の状況は表 2 に示したとおりである。

ボランティア・グループでの活動をとおして得たことを問う項目は、内閣府[9]の「ボランティア･ＮＰＯ･市民活動への参加によって得たこと」（「」は、設問ないし観測変数を示す）を問う 8 項目に独自の 1 項目「活動を通じ地域がより良い方向へと変化した」を加えた 9 項目を用い、5. 大いにそう思う、4. ややそう思

表1　各ボランティア・グループの概要

	結いの会	彩の会
目的	会員相互の親睦と協調を図りながら地域社会の福祉の向上発展に寄与する	会員相互の親睦と協調を図りながら障害者にやさしいボランティア活動を通して障害者と共に暮らしやすい地域社会をつくりあげ、地域福祉の向上に寄与する
事業	①自主的、積極的なボランティア活動に努める ②市内関係機関・団体と連携を図る ③会員の研修と親睦に努める ④その他目標達成のために必要なことは会員の総意で決める ※主たる活動：公的機関や駅周辺の植木剪定や清掃、配食の支援等	①自主的、積極的に障害者にやさしいボランティア活動に努める ②市内関係機関・団体との連携を図る ③会員の研修と親睦に努める ④その他目標達成のために必要なことは会員の総意で決める ※主たる活動：小規模作業所「集いの広場」の活動計画（作業、レクリェーション、駅の清掃、調理・接客、視察研修、等）に沿った協働
発足契機	1995（平成8）年度「町民総ボランティア推進事業」の一環として開催された「福祉学習講座」（受講者は男性のみ）第一期修了生有志の呼びかけにより結成	1998（平成11）年度「障害者にやさしいボランティア育成事業」の一環として開催された「障害者にやさしいボランティア講座」第一期修了生有志の呼びかけにより結成
会員	「福祉学習講座」修了生及び本会の趣旨に賛同する町民	「障害者にやさしいボランティア講座」修了生及び本会の趣旨に賛同する町民

う、3. どちらともいえない、2. あまりそう思わない、1. まったくそう思わない、の5件法により測定した。コミュニティに対する意識や実感を問う項目は、石盛[10]による「コミュニティ意識」測定尺度より6項目、Putnam[11]の社会関係資本の構成概念「社会的信頼」「互酬性の規範」を参考に、Yamagish & Yamagish[12]の「一般的信頼」尺度より1項目、「一般化された互酬性」について独自作成したものが1項目、Israel[13]らによる「コミュニティ・エンパワメント」の測定尺度を参考に独自作成したものが1項目、そして同地域におけるフィールドワークを踏まえ、「地域への所属感」、「地域の理解度」、「地域への関心」、「地域における決定への参画意識」、「地域の私生活への影響」、「地域における課題の認識」「地域活動への内発的動機づけ」「地域における援助への期待」について独自作成した8項目の計17項目を用い、5. 大いにそう思う、4. ややそう思う、3. どちらともいえない、2. あまりそう思わない、1. まったくそう思わない、の5件法により測定した。なお、本研究においては、対象に高齢者が多いこと、石盛[10]による「コミュニティ意識」測定尺度において、コミュニティを示す内容が地域と記述されていたことを踏まえ、質問項目ではコミュニティを地域と置き換えた。

また、質問紙の作成にあたっては、ボランティア活動の経験を有する住民1名、大学に所属する研究者1名を対象としたプレテストを行い、質問項目や内容を修正した。

倫理的配慮としては、調査に先立ち、まずO市M総合支所の担当者、「結いの会」会長、「彩の会」役員に対し、調査の主旨、プライバシーの保護（質問紙は無記名とし個人が特定されないこと、回答は自由意思によること）、調査結果は学術的目的以外に使用しないことを口頭と文書で説明し、調査協力の了解を得た。調査対象者に対しては、文書を用いて同様の内容を説明した。質問紙の回収にあたっては、配布時に回収用の封筒を同封し、これを用いるよう依頼した。

4. 分析方法

分析においては、まず得られたデータを単純集計した。つぎに、名義尺度を用いた6項目、自由記述による回答を求めた1項目、フロア効果が見られた1項目を除外した33項目について、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を踏まえ、共分散構造分析を行った。分析ソフトはSPSS14.0 for windowsとAMOS 7.0 for windowsを用いた。

表2調査項目一覧

分類	調査項目	観測変数の選択肢
①個人の属性	年齢	数値（月は切り捨て）
	性別	1．男性，2．女性
	就労経験	1．ある，0．ない
	職業	1．会社員，2．公務員，3．専門・技術職（医師・弁護士・教員等），4．農業，5．自営業，6．サービス業，7．その他
	就労状況	1．している，0．していない
	最終学歴	1．中学校，2．高等学校，3．専修学校，4．短期大学，5．大学・大学院，6．その他
	主観的健康感*1	4．とても健康である，3．まあまあ健康である，2．あまり健康ではない，1．まったく健康ではない
	育児・介護経験	4．大いにある，3．まあまあある，2．あまりない，1．まったくない
	被援助体験	4．大いにある，3．まあまあある，2．あまりない，1．まったくない
②居住する地域関連の属性	居住年数	数値（月は切り捨て）
	居住契機	1．出生，2．進学，3．就職，4．結婚，5．その他
	住居の形態	1．持ち家，2．分譲マンション，3．借家，4．賃貸マンション・アパート，5．その他
	友人・近所とのつきあい	4．大いにしている，3．まあまあしている，2．あまりしていない，1．まったくしていない
③ボランティア・グループにおける活動状況	所属グループ	1．結いの会，2．彩の会　*2
	活動年数	数値（月は切り捨て）
	活動への参加頻度	4．いつも参加している，3．ときどき参加している，2．あまり参加していない，1．まったく参加していない
	グループにおける役割（役職）	4．大いにある，3．まあまあある，2．あまりない，1．まったくない
	グループの決定への参画	4．大いにそう思う，3．ややそう思う，2．あまりそう思わない，1．まったくそう思わない
	養成講座の受講	1．受講した，0．受講していない
④③以外の地域活動状況	ボランティア・グループ以外の地域活動	4．大いにある，3．まあまあある，2．あまりない，1．まったくない
	行政計画策定過程への参画経験	4．大いにある，3．まあまあある，2．あまりない，1．まったくない

*1：岡戸[8]の主観的健康感を使用．

*2・所属グループは、質問項目に含めずグループ毎に異なる質問紙を用いることで把握．

Ⅲ．結果

1．対象者の概要

(1) 対象者の基本属性

対象者の平均年齢は 70.69 歳（SD=8.7）であり、「男性」が 40 名（65.6%）、「女性」が 21 名（34.4%）であった。最終学歴は、「高等学校」が 25 名（41.0%）と最も多く、ついで「中学校」9 名（14.8%）となっていた。就労経験は、「ある」が 57 名（93.4%）と大多数を占め、うち現在の就労状況は、「している」が 16 名（26.2%）であった。育児や介護経験の有無については、「大いにある」「まあまあある」をあわせた「経験あり群」が 28 名（46.0%）、「あまりない」「まったくない」を

あわせた「経験なし群」が 32 名（52.4%）となっており割合の差は小さかった。被援助経験については、上記同様「経験あり群」が 21 名（34.5%）、「経験なし群」が 49 名（64.0%）となっており「経験なし群」の割合が大きかった。主観的健康感は、「とても健康である」「まあまあ健康である」をあわせた「主観的健康群」が 51 名（83.6%）となっていた（表 3）。

同地域での平均居住年数は 53.51 年（SD=21.9）、居

表3　基本属性　　n=61

		度数	(%)
年齢 70.69（SD=8.75）	40-49歳	2	(3.3)
	50-59歳	6	(9.8)
	60-69歳	14	(23.0)
	70-79歳	32	(52.5)
	80- 歳	7	(11.5)
性別	男性	40	(65.6)
	女性	21	(34.4)
最終学歴	中学校	9	(14.8)
	高等学校	25	(41.0)
	専修学校	6	(9.8)
	短期大学	5	(8.2)
	大学・大学院	5	(8.2)
	その他	10	(16.4)
	無回答･不明	1	(1.6)
就労経験	ある	57	(93.4)
	ない	4	(6.6)
職業（複数回答）	会社員	19	(31.1)
	公務員	18	(29.5)
	専門・技術職	3	(4.9)
	農業	16	(26.2)
	自営業	6	(9.8)
	サービス業	5	(8.2)
	その他	3	(4.9)
就労状況	している	16	(26.2)
	していない	41	(67.2)
	無回答･不明	4	(6.6)
育児・介護経験	大いにある	14	(23.0)
	まあまあある	14	(23.0)
	あまりない	11	(18.0)
	まったくない	21	(34.4)
	無回答･不明	1	(1.6)
被援助経験	大いにある	4	(6.6)
	まあまあある	17	(27.9)
	あまりない	22	(36.1)
	まったくない	17	(27.9)
	無回答･不明	1	(1.6)
主観的健康感	とても健康である	10	(16.4)
	まあまあ健康である	41	(67.2)
	あまり健康ではない	10	(16.4)
	まったく健康ではない	0	(0.0)

住契機は、「出生」が 26 名（43.3%）と最も多く、ついで「結婚」が 20 名（33.3%）となっていた。住居の形態は、「持ち家」が 59 名（98.3%）と大多数を占めていた。友人や近所とのつきあいについては、「大いにしている」が 37 名（60.7%）、「まあまあしている」が 21 名（34.4%）となっており、両者をあわせた「している群」が約 95%を占めていた（表 4）。

（2）ボランティア・グループでの活動状況

対象者のボランティア・グループでの活動状況について、所属グループは、「結いの会」が 37 名（60.7%）、「彩の会」が 24 名（39.3%）、活動年数は平均 6.8 年（SD = 3.0）であった。活動への参加頻度は、「いつも参加している」「ときどき参加している」をあわせた「参加している群」が 49 名（80.4%）と大多数を占めていた。グループにおける役割（役職）については、「まったくない」が 34 名（55.7%）と最も多く、ついで「まあまあある」が 12 名（19.7%）となっていた。グループにおける決定への参画については、「ややそう思う」が 27 名（44.3%）と最も多く、ついで「あまりそう思わない」が 16 名（26.2%）となっていた。グループに参加する以前の、養成講座受講の有無については、「受講した」が 42 名（68.9%）、「受講していない」が 18 名（29.5%）となっていた（表 5）。

2. 探索的因子分析

調査項目のうち、名義尺度を用いた 6 項目、自由記述による回答を求めた 1 項目、フロア効果が見られた 1 項目を除外した 33 項目について、最尤法、プロマックス回転によって探索的因子分析を行なった。因子負荷行列の解釈可能性を考慮し、3 因子構造を採用した。そして因子負荷が 1 つの因子について 0.40 未満の項目を除外し因子分析を繰り返した結果、表 6 のとおり 3 因子 28 項目が抽出された。

第 1 因子は、対象者がボランティア・グループでの活動を、達成感や充実感を味わい、知識やノウハウを得つつ、コミュニティの一員としてのアイデンティティが形成されていく体験として意味づけていたことを示す項目群に高く負荷していることから、＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞（＜＞は、潜在変数を示す）と命名した。第 2 因子は、自己とコミュニティの関係性を意識した項目群に高く負荷していることから、＜コミュニティとの関係性への思慮＞と命名した。第 3 因子は、コミュニティに対して、主体的かつ能動的に関わろうという意識を示す項目群に高く負荷していることから、＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞と命名した。

3. 共分散構造分析の解析結果

まず、地域住民のボランティア・グループの活動による＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞の蓄積が＜コミュニティとの関係性への思慮＞を深化させたと仮定し、探索的因子分析によりみいだされた 3 因子を潜在変数とした仮説モデルを設定した。このモデルは、＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞を撹乱変数を持たない外生的潜在変数とし、＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞が＜コミュニティとの関係性への思慮＞と＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞を規定し、さらに＜コミュニティとの関係性への思慮＞が＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞を規定するとしたものである。そしてこのモデルにおける観測変数と潜在変数の関連を共分散構造分析によって解析し、最も高い適合度と決定係数の得られた結果を図 1 に示した。

図で示した観測変数と潜在変数の表現においては、観測変数「地域をよくするためには住民の決定が重要」を 自己決定重要 、誤差変数を⑪ ⓔ1と示した。観測変数の右上に示した数字は、各変数の寄与率である。調査では直接観測されない潜在変数は、（コミュニティへの主体的・能動的関与意識）、撹乱変数は㉑と示した。潜在変数の右上に示した数字は決定係数である。潜在変数と観測変数間及び潜在変数間の→は因果関係の方向を示し、矢印に付随した数字は標準化推定値を示す。

潜在変数と観測変数の関連をみるため、標準化推定値が 0.60 以上の観測変数に着目したところ、＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞では、「知識やノウハウ（技術）が豊かになった」（「」は、観測変数を示す）の標準化推定値が 0.83 と最も高く、ついで「地域のさまざまな人とのつながりができた」が 0.80、「活動の成果が実感できた」が 0.78、「地域・社会に対する貢献ができた」と「価値観を共有できる仲間ができた」が 0.75、「地域への愛着心が深まった」が 0.75、「地域・社会のしくみや問題がわかった」が 0.66 と高い値を示した。＜コミュニティとの関係性への思慮＞では、「私は、地域で起こる出来事に影響を与えることができる」が 0.80 と最も高く、ついで「私も参加して地域のあり方を決めている」が 0.77、「私はこの地域の一員である」が 0.75、「私は、この地域のことをよく理解していると思う」が 0.73、「私はいま住んでいる地域に誇りとか愛着のようなものを感じている」が 0.69、「この地域のありようは、私の生活に影響を与え

表4 居住する地域に関連する属性 n=61

	度数	(%)
0-19年	4	(6.6)
20-39年	14	(23.0)
40-59年	12	(19.7)
60- 年	29	(47.5)
無回答・不明	2	(3.3)
出生	26	(42.6)
就職	4	(6.6)
結婚	20	(32.8)
その他	9	(14.8)
無回答・不明	2	(3.3)
持ち家	59	(96.7)
借家	1	(1.6)
賃貸アパート・マンション	1	(1.6)
大いにしている	37	(60.7)
まあまあしている	21	(34.4)
あまりしていない	2	(3.3)
まったくしていない	0	(0.0)
無回答・不明	1	(1.6)

表5 ボランティア・グループでの活動状況 n=61

		度数	(%)
所属グループ	結いの会	37	(60.7)
	彩の会	24	(39.3)
活動歴 6.80 (SD=2.96)	0-4年	17	(27.9)
	5-10年	39	(63.9)
	無回答・不明	5	(8.2)
活動への参加頻度	いつも参加している	32	(52.5)
	ときどき参加している	17	(27.9)
	あまり参加していない	7	(11.5)
	まったく参加していない	5	(8.2)
グループにおける役割（役職）	大いにある	10	(16.4)
	まあまあある	12	(19.7)
	あまりない	3	(4.9)
	まったくない	34	(55.7)
	無回答・不明	2	(3.3)
グループにおける決定への参画	大いにそう思う	8	(13.1)
	ややそう思う	27	(44.3)
	あまりそう思わない	16	(26.2)
	まったくそう思わない	7	(11.5)
	無回答・不明	3	(4.9)
養成講座の受講	受講した	42	(68.9)
	受講していない	18	(29.5)
	無回答・不明	1	(1.6)

表6 探索的因子分析の結果（最尤法,プロマックス回転）

	因子1	因子2	因子3
第１因子：コミュニティアイデンティティ形成体験			
達成感や充実感を味わえた	**.883**	－.111	－.031
知識やノウハウ（技術）が豊かになった	**.863**	.185	－.192
地域のさまざまな人とのつながりができた	**.720**	.042	.070
地域への愛着心が深まった	**.710**	.149	－.099
グループにおける決定への参画	**.696**	－.080	－.044
価値観を共有できる仲間ができた	**.647**	.189	－.026
グループにおける活動への参加頻度	**.633**	－.087	－.069
活動の成果を実感できた	**.615**	－.144	.390
地域・社会に対する貢献ができた	**.599**	－.328	.515
地域・社会のしくみや問題がわかった	**.582**	.277	－.094
活動を通じ地域がより良い方向へと変化した	**.441**	－.147	.434
第２因子：コミュニティとの関係性への思慮			
地域で起こる出来事に影響を与えることができる	.168	**.895**	－.276
いま住んでいる地域に、誇りとか愛着のようなものを感じている	－.147	**.748**	.212
この地域には、解決しなければならない課題あり	－.099	**.628**	.032
行政計画策定過程への参画経験	.005	**.602**	.069
育児や介護の経験	－.152	**.601**	－.009
私も参加して地域のあり方を決めている	.132	**.601**	.148
この地域のありようは、私の生活にも影響を与える	.058	**.595**	.004
この地域の一員である	.236	**.581**	.000
この地域のことをよく理解している	.051	**.567**	.161
友人や近所の方とのおつきあい	.058	**.476**	－.013
第３因子：コミュニティへの主体的・能動的関与意識			
地域をよくするためには住民の自己決定が重要	－.195	.035	**.842**
この地域の人々は、困った時は助けてくれる	.011	－.055	**.716**
地域において活動すること自体楽しい	－.001	.159	**.613**
住み良い地域づくりにむけ積極的に活動したい	.120	.287	**.524**
私は、地域でおこる出来事に関心がある	.039	.393	**.455**
住み心地をよくするために、地域の人々と活動する気持ちあり	.057	.260	**.431**
地域での問題解決には、住民と行政の対等な関係が重要	－.319	.406	**.420**
因子間相関			
第２因子	.452		
第３因子	.500	.496	

*質問項目の表現は一部簡略化している。

る」が 0.64、「行政計画策定過程への参画経験」が 0.61 となっていた。＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞では、「住みよい地域づくりにむけ積極的に活動したい」「地域で起こる出来事に関心がある」が 0.70 と最も高く、ついで「地域において活動すること自体楽しいものである」が 0.69、「地域を良くするためには、住民みずからが決定することが重要である」が 0.64、「地域での問題解決には、住民と行政の対等な関係が重要」が 0.60 となっていた。

つぎに、潜在変数間の関連について、＜コミュニティとの関係性への思慮＞は＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞に大きく規定され（標準化推定値 0.60）、＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞は＜コミュニティとの関係性への思慮＞に大きく（標準化推定値 0.69）、＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞には小さく（標準化推定値 0.17）規定されていた。そして＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞の決定係数が 0.65 であることから、65％がこれらの潜在変数によって説明されることが明らかになった。さらに、本モデルの適合性を確認したところ、適合度指標（GFI）が 0.619、基準化適合度指標（NFI）が 0.558、平均二乗誤差平方根（RMSEA）は 0.108 で

あり、各指標とも満足できる値とはいえず、このモデルは必ずしも適合度の高い構成概念ではないことが示唆された。

そのため、つぎにモデルＡにおいて標準化推定値が 0.60 以上の観測変数の中から観測変数を選択し、最良のモデルを探索したところ、モデルＢがみいだされた（図 2）。

モデルＢにおいて、＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞では、「価値観を共有できる仲間ができた」の標準化推定値が 0.81 と最も高く、ついで「地域のさまざまな人とのつながりができた」が 0.79、「地域への愛着が深まった」が 0.73、「地域・社会に対する貢献ができた」が 0.69 となっていた。＜地域との関係性への思慮＞では、「私は、この地域のことをよく理解していると思う」が 0.78 と最も高く、ついで「いま住んでいる地域に、誇りとか愛着のようなものを感じている」が 0.69、「この地域のありようは、私の生活に影響を与える」が 0.64 となっていた。＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞では、「私は、地域で起こる出来事に関心がある」が 0.81 と最も高く、ついで「地域を良くするためには、住民みずからが決定することが重要である」が 0.64、「地域において活動すること自体楽しいものである」が 0.63 となっていた。

つぎに、潜在変数間の関連について、＜コミュニティとの関係性への思慮＞は＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞に大きく規定され（標準化推定値 0.63）、＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞は、＜コミュニティとの関係性への思慮＞にさらに大きく規定されていた（標準化推定値 0.92）。そして＜

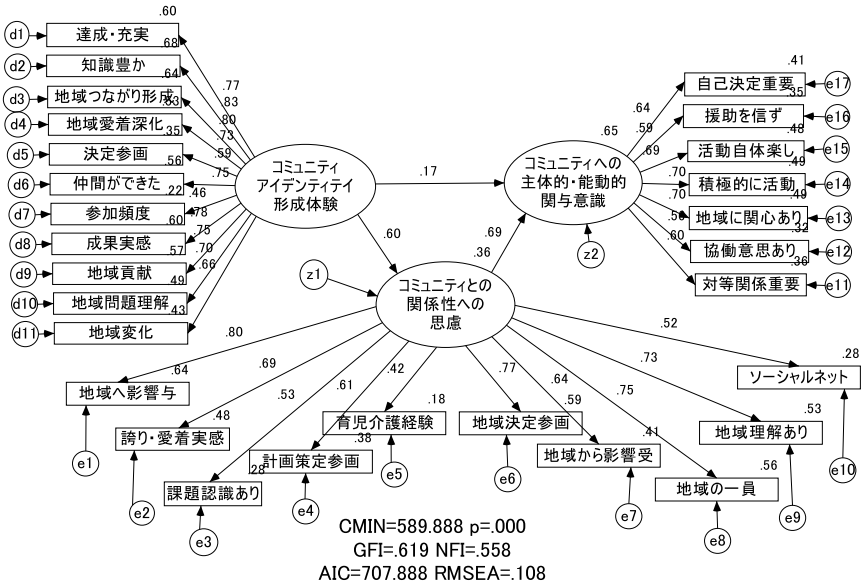

図1　モデルAの解析結果

（観測変数の欠損値を系統平均で補正）

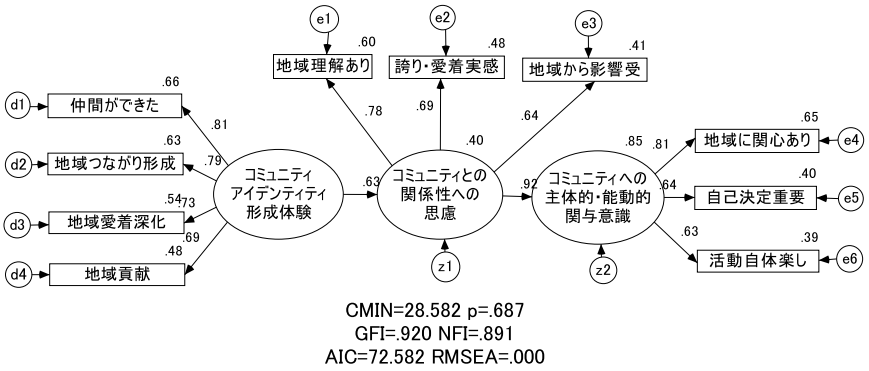

図2　モデルBの解析結果

（観測変数の欠損値を系統平均で補正）

コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞の決定係数が 0.85 であることから、85％がこれらの潜在変数によって説明されることが明らかになった。

さらに、本モデルの適合性を確認したところ、適合度指標（GFI）が 0.920、基準化適合度指標（NFI）が 0.891、平均二乗誤差平方根（RMSEA）は 0.001 であり、各指標ともほぼ満足できる値を示していたことから、このモデルは適合度の高い構成概念であることが示唆された。

Ⅳ．考察

1．地域住民のシチズンシップ形成に資するボランティア・グループでの体験

本研究においては、＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞がコミュニティのありようと自己を関連づけて理解していることを示す＜コミュニティとの関係性への思慮＞によって大きく規定され、＜コミュニティとの関係性への思慮＞が＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞によって規定されていることが明らかになった。これは、ボランティア・グループ成員の＜コミュニティへの主体的・能動的関与意識＞の形成に、ボランティア活動の内容や質、ボランティア・グループでの体験が大きく関与していることを示す結果とも考えられる。では、どのような体験が地域住民のシチズンシップ形成を促すのであろうか。

(1) 地域社会の課題と真剣に向き合うという体験

これまで筆者は、M 地域の同実践活動及びこの活動に内包される「町民総ボランティア運動」の展開過程について論じてきた[6,7]。これらの活動は、村上が示しているような「社会の課題と真剣に向き合う本物の活動[14]」であったと考えられる。ボランティア・グループ成員は「利他的な価値観を基盤として、公正な社会とは何かを深く考え、今生きている人間の都合だけではなく未来の人々にたいする責任を意識して行動する[14]」という市民倫理性を身につけるための体験を積み重ねる中で＜コミュニティとの関係性への思慮＞を深めていったことが推測される。このことから、コミュニティ・エンパワメントを念頭におき、ボランティア・グループでの活動を地域住民のシチズンシップ形成に資するものとしていくためには、活動の中に、グループ成員が地域社会の課題を認識しその課題と真剣に向き合うという体験を内包させることが非常に有用である可能性が示唆された。

(2) グループ成員のコミュニティ感覚の高揚を促進する体験

つぎに、ボランティア・グループでの体験を考察するうえで、＜コミュニティアイデンティティ形成体験＞の観測変数のうち、「価値観を共有できる仲間ができた」の標準推定値が 0.81 と最も大きな数値を示していたことも注目すべき点であると考えられる。これは、McMillan & Chavis[15] によって提示されたコミュニティ感覚（Psychological sense of community）の一側面を示すものとも考えられる。

そして、このような結果となった背景についても検討したところ、持ち家が 59 名（98.3%）、友人や近所とのつきあいをしている群が 59 名（95.1％）という村落特有の緊密なソーシャルネットワークを基盤とし、先にも示したとおり、ボランティア・グループでの活動が地域社会の課題を認識しその課題と真剣に向き合うという体験を内包していたこと、グループの決定への参画において「そう思う群」が 35 名（57.4%）と半数を超えていたこと、活動への参加頻度において「参加している群」が 49 名（80.3％）と非常に高いこと、そして二つのグループとも事業内容として「会員の研修と親睦に努める」ことが明確に規定されていたことが関連していたのではないかと推測される。本研究はグループ成員のコミュニティ感覚の規定要因に焦点をあてたものではないため、さらなる検討が必要となるが、地域住民のシチズンシップ形成においては、グループ成員のコミュニティ感覚の高揚を促進する体験を内包させていくことの意義も示唆された。

(3) 今後の研究課題

本研究では、ボランティア・グループ成員の活動への意味づけとコミュニティへの意識に着目し、コミュニティへの主体的・能動的関与意識形成の概念モデルを設定し、このような意識を規定する要因を明らかにした。しかし、これらの結果は、あくまで同地域における二つのグループを対象とした横断的な調査から得られたものであり、地域住民のシチズンシップ形成過程を解明するうえでの基礎的資料としては有用であるものの、このモデルの外的妥当性を高めていくためには、追跡調査の実施、他の事例との比較及び介入研究を実施し、その因果構造を明確にていくことが研究課題と考える。

また、先にも示したように、地域住民のシチズンシップ形成の規定要因を明らかにするためには、ボランティア・グループでの活動とグループ成員のコミュニティ感覚の関連に着目することが重要性あることも

示唆された。そのため、今後はこれらの示唆を手がかりとした、新たな研究も重要な研究課題と考えられる。

文献

1）内閣府、平成 16 年版国民生活白書－人のつながりが変える暮らしと地域－新しい「公共」への道、2004
2）厚生労働省、平成 17 年版厚生労働白書－地域とともに支えるこれからの社会保障 -、2005
3）栃本 一三郎、21 世紀の社会像—シチズンシップをどう確保するか (特集 ボランティア・NPO 活動の基盤整備・社会的支援を考える)、月刊福祉、1996；79(10)：12-15
4）栃本一三郎、地域福祉と NPO-「福祉の市民化」から見た市民の協働、参加、エンパワメント (特集 NPO　市民セクターの可能性)、都市問題、1997；88(4)：23-37
5）祐成善次、はじめに、ボランティア白書 (2005)- ボランティアのシチズンシップ再考 -、日本青年奉仕協会、2005：3
6）下山田鮎美・吉武清實・上埜高志、エンパワーされたコミュニティの創生過程に関する研究 (第 1 報)-A 県 M 町におけるソーシャルサポート・ネットワーキングの過程 - 、コミュニティ心理学研究、2006；9(2)：149-163
7）下山田鮎美・吉武清實・上埜高志、エンパワーされたコミュニティの創生過程に関する研究 (第 2 報)- コア・メンバーらを突き動かす創発的な社会的相互作用の過程 - 、コミュニティ心理学研究、2007；11(1)：56-75
8）岡戸順一、高齢者の社会的ネットワークと主観的健康感との関連 . 東洋大学発達臨床研究紀要、2002；2：75-86
9）内閣府経済社会総合研究所、コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書；2005：130
10）石盛真徳、コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加－コミュニティ意識尺度の開発を通じて－、コミュニティ心理学研究、2004；7(2)：87-98
11）Putnam, R., Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy. Princeton,Princeton University Press,1993(哲学する民主主義 - 伝統と改革の市民構造 -(河田潤一訳),NTT 出版,2001.)
12）Toshio Yamagishi & Midori Yamagishi. Trust and commitment in the United States and Japan. Motivation and Emotion 1994;18(2), 129-166
13）Israel, B. A., Checkoway, B., Schulz,A.,& Zimmerman, M. Health education and community empowerment:Conceptualizing and measuring perceptions of individual, organizational and community control. Health Education Quaterly1994 ;21(2):149-170
14）村上徹也、ボランティアのシチズンシップを再考する、ボランティア白書（2005）- ボランティアのシチズンシップ再考 -、日本青年奉仕協会、2005：9-20
15）McMillan, D.W., & Chavis, D.M.. Sense of community:A definition and theory. Journal of Community Psychology1986;14(1):6-23